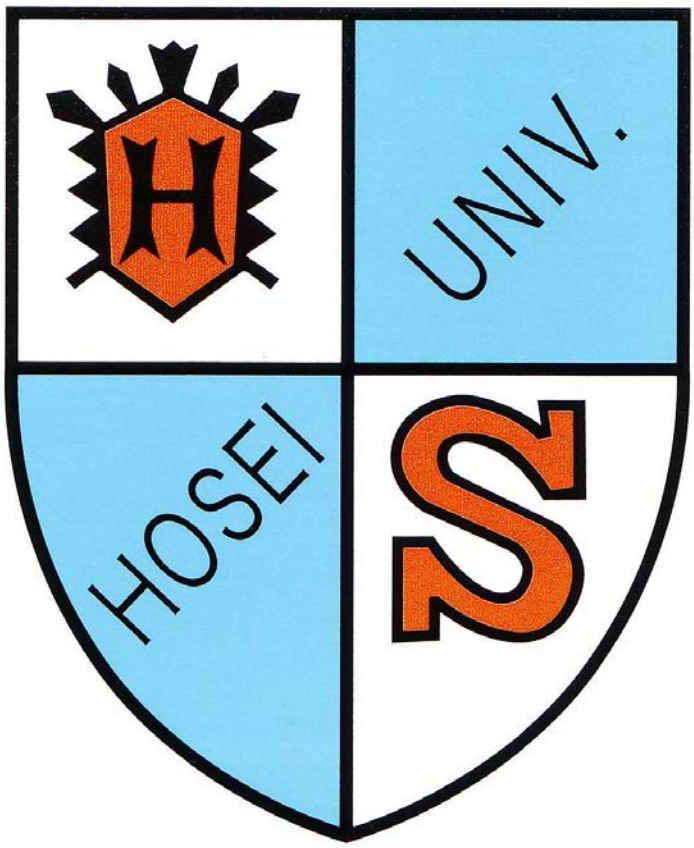
# 法政大学国際高等学校

## 評価に関するポリシー




v.1.00 2022

# 評価に関するポリシー

## 評価に関する考え方

本校は「評価」と評価の機会を次のように捉えている。

「評価」は、学習者一人ひとりが学習プログラムにおける成長度、深まりの度合いや質を確認し、それまでの学習方法や計画を点検し、次の段階、目標に向かって主体的に進むためにある。それは授業を受ける側のためだけにあるのではなく、科目担当者と学科がそれまでの授業法や指導法、および授業計画を点検し、必要に応じて適切に修正するために行われる。その積み重ねによって、学校全体がより質の高い教育課程を創り上げていくための不可欠の作業、
それが「評価」である。

こうした把握・捉え方に立って、本校は次を原則に「評価」を行う。

・各科目の学習内容に直接関連付けて行う。
・集団内の相対的な基準に従うのではなく、明確な評価基準に則って行う。
・当該の科目を受講するすべての学習者に「評価」の手順・基準・方針を前もって示し、これに従って行う。

## 評価の基軸―学習目標と評価

本校はグローバル探究コース・IB コース共通の学習目標に、「5 つのスキル」の獲得、習得を掲げている。したがって、各科目の「評価」は、あらかじめ学習者に示す評価基準（ルーブリック）をもとに、5 つスキルごとに到達度を測り、これらを総合して示される。2022 年度より導入された「3 観点別評価」についても、本校では 3 観点のうちの「知識と技能」を「5 スキル獲得のために積み重ねておくべき基礎的・基本的な知識・技能技術」とし、「思考・判断・表現力」を「思考スキル・コミュニケーションスキル・ソーシャルスキル・リサーチスキル」の獲得と成長度で、また「主体的に学びに向かう態度」を「自己管理スキル」の到達・達成度で示す。

### Ⅰ．5つのスキル

本校が獲得と習得を目指す「5 つのスキル」は、複雑で解決が困難な課題に向かい、これを乗り越え解決の道筋を見出していくために必要な、「自由を生き抜く実践知」を備えた「地球市民」となるために必要な「力」「技量」である。

以下、5 つのスキルがどのような質の力であるか、簡潔に示す。

〇思考スキル：問題の本質を突き止め、今ある情報を正しく、かつ効果的に組み合わせて、確かな根拠に基づいて、論理的かつ創造的に現時点におけるもっとも有効、妥当な「解」、解決策を考え出す能力。

〇コミュニケーションスキル：みずからの考えを主張としてまとめ、適切に、効果的に伝える力、

表現する力。また、他者の主張・表現を正しく理解し、「対話」を通じて相互の理解を生み出していく力。

〇ソーシャル（社会性）スキル：発見し、獲得した「知」や疑問、意見（見解）を、他者とも共有して課題解決のための協働の空間を創ろうとする構えとその方法を確立する力。

〇自己管理スキル：学習や研究において、到達地点を見据えて取り組むべき量や質を理解し、また自分の能力を把握して、とるべき行動の順序や時間の配分などを適切に管理し、実践する力。学習・研究の計画を立て、実行し、必要に応じて修正する力。

〇リサーチスキル：課題や研究に関してみずから問題を設定し、その追究、解明のためには、どのような調査、研究が必要なのかを見定め、いま持っている情報と持っていない情報を整理し、自分に必要な新しい情報を得るためにはどうすればいいのかを考え、行動する力。手にした情報の正誤を判断する能力も含む。

### Ⅱ．授業時間外の自学習、課題（宿題）への取り組みと評価

授業時間外の自学習、課題（宿題）への取り組みは、グローバル探究生にとってもIBコース生にとっても重要である。自学習の目的は授業で学んだ事項をあらためて捉え直し、みずからの力とすることにあり、そして次回の授業内容を事前に確認し、さらに次の段階の応用や実践に進むためにある。各科目から課される課題（宿題）への取り組みも、同様に探究をより深め、次のステップに繋げていくためにある。本校は、こうした自学習や課題（宿題）への取り組みも、自己管理スキルの一つとして評価する。

## 評価の実践

本校は、学びの過程において学習者がどの程度まで学びを理解し深めているか、必要に応じて評価し（形成的評価）、また年次の最後の時点でどこまで学びが到達し、どのような質の学力が獲得できたのか評価する（総合的評価）。

### Ⅰ．形成的評価―次の学びに結びつけるための評価

各教科の担当教員は、学習者の学びの深まりを観察し、適宜形成的な評価を示すことで、学習者が一定の学力水準に到達し、さらにより高次の学びへ進めるよう導いていく。形成的評価は、学習者にとってはそれまでの学習の成果を確認し、次の段階の目標、学習計画を立てるために必要なものであり、教える側にとっても、何が学ばれ学ばれなかったかが明らかになると同時に、授業計画や教材の有効性を把握し、点検修正する手がかりとなる。このように、本校は、形成的評価が教育実践の場における不可欠な要素と考えている。

### Ⅱ．総合的評価―学びに対する最終的な評価

学習者の学びの到達度は、各年次末の総合的評価（成績）によって 10 段階で示される。総合的評価は、各科目の課題や試験その他からなるいわゆるペーパー試験の結果だけではなく、課題レポート、調査研究、実技披露、発表、そして課題への取り組み等々を総合して算出される。これ

ら評価対象となる取り組みについては、基本的にあらかじめ評価基準（評価ルーブリック）が示され、学習者は学びの力として、どのような力・質のものがどの程度求められているのかを理解した上で取り組むことになる。

### Ⅲ．相互評価と自己評価

本校は、日常的に学習者自身が自己の学びを評価する機会、また学習者同士がお互いの学びを評価し合う機会を設けている。自他の学びの成果を点検・分析・評価する営みは、成果物を対象化して正当に把握する力の獲得に繋がり、なによりも他の優れた成果（研究発表やエッセイ、プレゼンテーション等）に触れることで、学習者同士が刺激し合い、次のより高い学習目標を設定することに繋がるからである。

## 成績評価の通知　グローバル探究コース・ＩＢコース共通

４学期制に基づき、成績評価は、「前期（1・2 学期）総合成績」「後期（3・4 学期）総合成績」および「年次総合成績」として、10 段階評価で通知される。なお、３年目においては、「前期（1・２学期）総合成績」と「３学期成績」および「年次総合成績」として、10 段階評価で通知される。

10 段階で通知するこの評価は、学内の平均値から換算して相対的に算出したものではなく、明確な基準に基づく、学習者の学習活動とその成果の絶対評価である。

なお、1年目必履修科目の「Critical thinking」、2・3年目自由選択科目である「Project-based Learning」については、単位の認定のみを行い評定としての評価はつけない。

## 単位の修得・未修得について

年次総合成績の 10 段階評価において「3」以上の評価を得た科目は、単位修得となる。しかし「1」または「2」の評価のとき、その科目は成績不良による単位未修得となる。また、欠課時数が、その科目の単位数×35 週の 1/3 を超えた場合も単位未修得となる。前期総合成績、またⅢ期成績の確認後に成績の不良、欠課時数の超過が危ぶまれる学習者に対しては「警告」を発する。

成績不良による単位未修得の場合、あらためて科目担当教員の再指導を受けた後、再評価の機会に臨むことができる。ここで単位修得に見合う評価を得た場合は単位修得が認められる（但し、成績評価は規定により単位修得下限の「3」となる）。欠課時数超過による単位未修得の場合、原則として単位未修得が確定する。単位未修得科目については、次年度あらためて履修し、修得し直すことができる。

本校の卒業に必要な単位数は、74 単位（HR を含まない）である。これはあくまで高校卒業資格に必要な単位数であって、グローバル探究コース生においては、各自がさらに高い次元のスキルや能力獲得・向上に向けて、この数にとどまらずにさらに科目を履修し修得することが望ましい。DP 取得を目指す IB コース生は、DP 科目の受講によって、三年間の総単位数はおおむね定まることになる。詳細は、『評価ポリシー細目（DP)』の『１　DP コース生の高等学校教育課程の単位修得・成績評価について』の項を参照のこと。なお、IB 生のみに示される評価についても、

この項で示す。

法政大学への内部推薦において、またその他の進路においても 74 単位以上の単位修得が、また必要な科目の履修及び単位修得が必要となる場合があるので、入学後の進路支援部による各種ガイダンス、配布される「進路の手引き」に注意が必要である。

# IBコース生のDiploma取得に関して

Dual Language Diploma Program(DLDP)は、５つまたは６つの学術分野の教科から、６つの科目を学ぶことを必要とする厳格なプログラムである。そのうち、3科目は「標準レベル(SL)」で、3科目は「上級レベル(HL)」で学習しなければならない。さらに、Theory of Knowledge(TOK 知の理論）を履修し、4000語（英語）もしくは8000語（日本語）のExtended Essay(EE 課題論文）を執筆し、Creativity,Activity,Service(「CAS」、「創造性・活動・奉仕」）プログラムを完遂しなければならない。

本校のDP (Diploma Program)で履修する科目を生徒が選択するプロセスは、Pre-IBの年次（1年次）の３期に始まる。その過程が記載されている『DPハンドブック』は、入学した4月に行われる新入生ＩＢオリエンテーションにて配布される。

本校での具体的なDP科目の決定プロセスについては、『評価ポリシー細目（DP）』の『細目2　DPで選択する科目を決定するプロセスについて』の項を参考のこと。

IB生は、学内および外部で評価される学習課題・試験を、完成・受験することが求められる。各科目に対して、IBにより策定・出版された「Moderated Grade Boundaries」に基づいて、最終的に１(low)から７(high)の到達レベル（評定）が与えられる。IB生は、全科目最高評定を得た場合、42点の得点を達成することができる。TOKとEEの学習成果に対する評価の組み合わせによって、最高３点までの得点が付与される。したがって、DLDPの完全スコア（最高得点）は45である。CASに評点は与えられないが、その完遂は必須であって、CASプログラムを完遂しない学生にはディプロマは授与されない。DLDPにおける落第条件の全リストについては、付録２を参照されたい。

本校の生徒は、「Pamoja」オンライン授業でGroup3またはGroup５の科目を履修することで、バイリンガルディプロマの資格を得ることができる。「Pamoja」の受講に関しては、慎重に判断をする必要がある。「言語に関するポリシー」および、『評価ポリシー細目（DP）』の『３　パモジャ受講に関するポリシー 』の項を参考のこと。

学内でなされる内部評価の裁定は、IBから示された明確な評価基準に従って本校の科目担当教員によって行われる。その評価が、作成された提出物（および試験答案）の質を正確に反映しているかを確認するため、内部評価のいくつかのサンプルは、IB検査員たちによってチェックされ、必要ならば評価の加減がなされる。

# 評価のスケジュール（ＩＢコース）

このプログラムで学ぶ期間中、IB生は各科目における数多くの内部評価の材料、および外部評

価の材料の提出を求められる。各科目およびEEとTOKのすべての提出日を、IB生ならび保護者に周知されるべく、学校は評価材料の提出に関するカレンダーを発行する。

## 評価と入学受入れ（ＩＢコース）

IBコースの入学選抜過程における入学者の特定のための条件として、志願者が、入学後に本校が課すことになる数多くの評価課題を完遂できるか否か、志願者にはそうした力が備わっているか否かが問われることになる。入学選抜の査定には、筆記試験と面接試験が含まれ、その査定・評価の基準はあらかじめ受験生に公表される。また、それ以前に在籍していた学校の学業達成の記録も考慮に入れられる。本校IBコース入学希望者および保護者は、評価と入学選抜の詳細について、アドミッションポリシーを参照されたい。

## IB Certificates　DP科目修了証明

本校は、現在、G探生もIB Certificate の取得を可能とする科目を設置している。具体的には、グローバル探究コース生徒が履修する場合のEnglish Bである。英語の技能が十分であると見なされる生徒のみ受講できる。詳細は「言語に関するポリシー」を参考のこと。

DP生においても、フルディプロマを目指さない場合、科目ごとに「IB Certificates 」を取得することが可能である。ただし、取得のためには、IBコースの当該の授業を年間スケジュール全てにおいて受講することが必要であり、DP2の7月末に行われる模擬試験、10月下旬～11月下旬に行われるFinal試験を受験することが必要である。

## 評価と評価に関する特別措置（ＩＢコース）

IBコース生への特別支援に関しては、IBの評価規則に則ってIB機構と意見交換を行う。評価と教育上の特別支援についての詳細は、「教育上の支援に関するポリシー」に掲載されている

### 本方針の改訂について

本方針は、年次更新される。改訂された方針はすべての志願者、学校関係者に開示される。